会話における親アイデンティティ

——子どもについての知識をめぐる行為の連鎖——

戸江 哲理*

本稿は、ある会話的な手続きの解明を目指している。またこの作業を通じて、親という立場がコミュニケーションにおいて実現されるプロセスを例証したい。この会話的な手続きは、子ども（乳幼児）をめぐる親と親ではない者の発言によって遂行される、行為の連鎖である。この行為の連鎖は、呼応する2つの行為（と付随的な行為）から構成されている。連鎖第1成分を親ではない者が、連鎖第2成分を親が遂行する。連鎖第1成分の発言は親に対して、子どもが現在この場で取った行動を子どもの普段の様子に位置づけるように促す。本稿はこれを〈説明促し〉と呼ぶ。説明促しは、その話者が当該子どもについてよく知らないことを発言のなかに刻印することで認識可能となる。そしてこの知識の欠如は、説明促しが当該子どもの行動が生じた後の位置で、描写というかたちを取って組み立てられることで刻印される。これに対して連鎖第2成分の発言を差し出す親は、自分のほうが子どもについて詳しいという含意をもつ応答をする。この応答には、詳しいという証拠があるタイプとないタイプがある。子どもの普段の様子が語られる応答は前者である。また応答が後者である場合、連鎖第1成分の話者は、前者のような応答を求めてもっと直接的な手段で子どもの普段の様子についての情報を要求することができる。このような説明促し連鎖を通じて、親は子どもにかんする〈応答可能性＝責任〉を果たしているといえる。

キーワード：会話分析、乳幼児をもつ親、知識上の秩序

1 はじめに

本稿の目的は2つある。1つ目は、ある発言の連鎖の構造を会話分析によって解明することである。2つ目はそれを通じて、親という立場（アイデンティティ・役割）が会話のなかでどのように立ち現れるのかを解明することである。

日常生活は諸々のコミュニケーションを不可欠の契機として成り立っているのだから、人々がどのような立場にある者としてふるまい、また他者から見なされている

* 日本学術振興会特別研究員 PD（奈良女子大学） toe@socio.kyoto-u.ac.jp

るのかという問題を解明することは、アイデンティティ・役割と呼ばれるものを考えるうえできわめて重要である (Antaki and Widdicombe eds. 1998).

本稿では、子ども (0~3 歳までの乳幼児) をめぐる親たちの会話において、その場にいる人々 (以下では参与者とも呼ぶ) が、どのように親という役割に注意を払いながら (以下では指向とも呼ぶ)、コミュニケーションを行っているのかを解明していく。そのなかで本稿がとくに光を当てるのは、親がもつと期待される子どもについての知識に対する権限 (以下ではアクセスとも呼ぶ) が、会話のなかでどのようにやりくりされているのかという点である。

たとえば、次の会話データにそのやりくりを見ることができる。A は 01 行目で、B の子ども (11ヵ月) が直前に取った、座ったままジャンプしながら移動するという行動について発言している (トランスクリプト記号の表記法については本稿末尾を参照)。

(1) お尻で移動

((A は子育て支援サークルのスタッフ、B は母親))

→01 A : hun °huh huh° お尻で動いてました [ね、

*02 B : [そうそうそう

03 (0.4)

*04 B : ↑ちょっとの距離はこれで移動する

05 A : あ h あ h:h:h ↑そうなんですか.=

06 B : =うん.=

A は、B の子どもが直前に取った行動を〈描写〉している (01 行目)。B はこの A の発言に対して「そうそうそう」と応答し、〈同意〉している (02 行目)。もっと精確に言うとは、この描写に対して〈お墨つき〉を与えている。この発言がお墨つきであるというのは、B の「そうそうそう」という応答の組み立てかたが、自分がすでに到達している知識 (つまり、B の子どもがお尻で移動すること) に A が到達したことを認識し、その描写の正しさを〈承認〉(Stivers 2005) したというニュアンスをもつからだ。このようなニュアンスは、同じく A の描写に同意する場合であっても、次のような表現を採用した場合には見られないものである。

(2) 架空

01 A : hun °huh huh° お尻で動いてました [ね、

02 B : [ほんまやなあ

ここで「ほんまやなあ」(02 行目) と述べることは、「そうそうそう」と同じく、同意するために選択可能なオプションである。しかし母親である B が (そして A は、B がこの子どもの母親であることを知っている)、この同意のしかたを取ると

少々不自然である。それは、この同意のしかたが「そうそうそう」とは逆に、「Aに指摘されてはじめてそのことに気がついた」というニュアンスをふくんでいるからである。つまりこれは、子どもにかんする知識上のアクセスがないことを伝える同意の組み立てかたなのである¹⁾。

以上からデータ1でBは、Aによる子どもの行動の描写への応答において、親ではないAよりも子どものことを知っているべき者としてふるまっていることがわかる。つまり親という立場が、このやりとりにおいて立ち現れはじめている²⁾。

2 連鎖の構造

しかしこのやりとりは、親が親以外の者による描写を承認しただけで完了してはいない。この描写はむしろ、親がさらに何か特定のタイプの発言をすることを求めているように見える。それは、親であることの証拠を挙げるような発言である。先の描写に対する承認は、親であることの主張ではあっても、その証拠は示されていない。親以外の者による描写は、それへの承認だけでなく、親であることの証拠を挙げる発言をも求めている。データ1の場合、求められていた発言は04行目の「↑ちょっとの距離はこれで移動する」というBの発言である。

この発言がどのような形式で、親であることの証拠を挙げているのかを検討しよう。この発言は、子どものこの行動を「XならばY」というかたちで定式化している。つまりBはこの定式化によって、この場で生じた1回かぎりのできごとを一般的な類型のひとつの例として位置づけ直している。H. Garfinkel (1967: 77-9)のいう〈解釈のドキュメント的手法〉が、ここでは用いられているのである。このことを通じてBは、普段から子どもの世話をし、その行動のパターンを把握している者という立場にあることを示している。

次に、この発言が置かれた位置に注目しよう。この発言は、02行目でAの描写を承認した後で述べられている。もしAの描写が促すものが承認だけなら、Bはこの位置で発言するとしても、何か別の話題を導入することもできたはずである。しかしBはそうすることなく、Aが描写した子どもの行動について、親であることの証拠を挙げるような発言をしている。このことは、Aによる描写への応答として、お墨つきを与えるだけでは不十分だとBが理解したことを意味している。換言すると、Aの描写がBに対して期待している行為は承認だけではないのである。

つまりこの描写は、現下に生じた子どもの行動を日頃の子どもの様子のなかに位置づけて説明するという行為を条件づけている。Bが04行目で遂行しているのは、正にそのような行為である。また、Bが自分からこの行為を遂行していることから、BがAの期待していた行為を理解していたことがわかる。つまり01行目から04行目までの一連のやりとりは、参与者相互の期待によって結びついた、行為の〈連鎖〉なのである。そしてそのなかに、子どもの普段の様子を知っているべき者とし

ての親という役割が、埋め込まれているのである。

連鎖の構造は次のようになる。連鎖第1成分は親以外の者（X）によって、連鎖第2成分は親（Y）によって差し出される。連鎖第2成分は、①・②のどちらも差し出される場合と、①しか差し出されない場合がある。後者の場合、Xから04行目の発言が差し出される。

01	X	: 子どもの行動の描写（連鎖第1成分）	
02	Y	: 01行目の承認（連鎖第2成分①）	
03	Y	: 普段の子どもの様子への位置づけ（連鎖第2成分②）	
04	X	: 03行目の追求（付随的な連鎖成分）	

本稿の目的は、この連鎖の構造を以上のような会話分析の手法によって詳らかにしていくことである。それを通じて、親という立場がリアルタイムのコミュニケーションのなかで立ち現れるプロセスが例証される。

以下、次のように議論を進める。3節で先行研究を確認し、本稿の扱う連鎖の位置づけを明確にする。4節では分析への準備として、データとフィールドについて説明する。5節～7節は会話データの分析である。5節では連鎖第1成分、6節では連鎖第2成分、7節では付随的な連鎖成分を分析する。8節で結論を述べる。

3 先行研究との比較検討と本稿の位置づけ

データ1の検討で例示されたように、本稿が取り上げる発言の連鎖は、参与者どうしの子どもをめぐる知識の上下関係（もしくは〈勾配〉）によって推進されている。これに関連して近年、〈知識（認識）上の秩序（epistemic order）〉という名のもとに会話分析的な研究が本格化している。とくに〈評価〉という行為の連鎖における知識上の秩序について研究の蓄積が進んでいる（Heritage 2002; Heritage and Raymond 2005; Raymond and Heritage 2006）。

評価という行為は、同じ対象に対して他の参加者が評価することを条件づける。このとき、後の位置でなされる評価（第2の評価）は、はじめになされた評価（第1の評価）に対する同意/非同意として組み立てられる（Pomerantz 1984a）。つまり、第2の評価のコンテキストは第1の評価によって作られるのである。したがって、評価の〈位置〉という観点から見た場合、第1の位置で評価することは知識上で優位であるというふくみをもち、また逆に第2の位置で評価することは知識上で劣位な立場であるというふくみをもつ（Heritage 2002: 200; Heritage and Raymond 2005: 16）。

このことは第2の位置で評価することになった者が、その位置で評価する立場に置かれたことに抵抗し、第1の評価者に対して自分の優位性を伝えるには、それを伝えるようなかたちで発言を組み立てる必要があることを意味する。そのための手

立てとして注目されてきたのは、主として文法的なりソースである。たとえば、英語なら発言の冒頭を“oh”ではじめる (Heritage 2002) とか、日本語なら発言の末尾を「よ」で締めくくる (Hayano 2011) とか、あるいは第1の評価者とは別の時制を用いる (Heritage 2002; Raymond and Heritage 2006) などといったことが指摘されてきた。

同じように本稿が取り上げる連鎖でも、第2の位置で発言する立場に置かれた親は、第1の位置で発言した者に対して、知識上の優位性を伝えようとしているように見える。つまり親は、自分以外は知りえないような子どもの普段の様子を語ることで、第2の位置に由来する知識上の劣位を挽回しようとしているように見える (Heritage and Lindström 1998; Heritage 2002: 207-9)。

とはいえ5節で詳しく検討するように、本稿が取り上げる行為の連鎖と評価の連鎖は少し違っている。また評価の連鎖以外の行為の連鎖について、そのメカニズムを知識上の秩序との関連で正面から検討した研究 (Stivers 2005; Heritage 2008) もいくつかあるが、本稿が取り上げる連鎖はこれらの連鎖とも違いがある。さらに日本語の会話分析 (串田 2006; 西阪 2008) においては、知識上の秩序に関連した研究 (串田 2006: 114-55; Suzuki 2009; Hayano 2011) 自体が限られている。このなかにあって本稿は、子どもをめぐる行為の連鎖が知識上の勾配によって推進されるメカニズムを解明するものである。

また本稿では、知識上の秩序をめぐる会話分析の射程を拡張し、エスノメソドロジー・会話分析の古典的なテーマを追究するうえでの意義を示したいと思う。先に述べたように知識上の秩序をめぐる会話分析的な研究は現在、文法的な要素の担う役割に関心があつまっている。しかし、人々が特定の知識を特定の人物やグループと関連させて捉える実践は、W. W. Sharrock (1974) に代表されるようにエスノメソドロジー・会話分析で長く研究されてきたテーマである。本稿は、会話の参与者たちが子どもについての特権的な知識を誰にどのようなかたちで求めるのかを会話分析によって解明し、このテーマに新しい角度からアプローチするものともなるだろう。

4 データとフィールド

データ2・データ3以外のデータは、大阪府下の2つの子育て支援サークルでスタッフと利用者の許可を得て撮影したものである (データの人名はすべて仮名)。これらのデータが撮影された場面は、乳幼児 (0~3歳児) をもつ親が子どもを目の届く範囲で自由に遊ばせながら、他の親たちと話をしている場面である。またスタッフたちも、近くで親と話したり、子どもの相手をしたりしている³⁾。

5 連鎖第1成分

5.1 説明促し

3節で見たように、知識上の秩序という問題から見た場合、本稿が扱う連鎖は評価の連鎖とよく似ている。しかし本稿が扱う連鎖の第1成分は、評価と似てはいるが同じではない。たとえば、先に見たようにデータ1でAが01行目で行っていることは、評価というよりも彼がその場で観察したことを述べた〈描写〉と呼ぶべきものである⁴⁾。

したがって分析ではまず、この連鎖の第1成分が遂行している行為は何なのかを詳らかにしなければならない。すでにデータ1の検討で、連鎖第1成分の話者が、連鎖第2成分の話者である親に対して、劣位の立場にある者として発言していることは確認済みである。では、第1成分はどのような意味で劣位であり、第2成分はどのような意味で優位なのだろうか。これを明らかにすることが、第1成分の行為を明らかにすることにつながる。

第1成分が知識上劣位にあることは、主として次の2つの要素から認識可能となる。①この場で生じた子どもの行動についての発言であること、②見てわかることの描写であること、この2つである。これに対して第2成分が知識上優位にあることは、データ1で見たように次の2つの要素からなる。④第1成分の話者の発言に対して承認を与えていること、⑤子どもの普段の様子についての情報をふくんだ発言であること、この2つである。

これらの要素は後で詳しく検討するとして、この段階で次のことがいえる。それは、この連鎖が〈釣り出し装置〉(Pomerantz 1980)と呼ばれる手続きとよく似ているということである。この手続きは、偶然的に入手した情報について、その情報を知っているべき者に対して語ることが、相手からこの情報についての語りを引き出すものになるというものである。たとえば、次のようなケースである。

(3) A. Pomerantz (1980: 189) ((日本語訳・一部単純化))

01 A : あなたの家の電話ずっと通話中だったね。

02 B : ああ私のち(hh) hh 私の父親の奥さんが電話してきてね…

AにとってB宅の電話が通話中だったことは、B宅に電話することによって〈偶然〉得た情報である。これに対してBは父親の妻からの電話を受けた側なのだから、このできごとについて知っている〈べき〉人物である。このような場合にAの発言は、Bからこのできごとにかんする語りを引き出すものとなる。

注目すべきは、Aの発言は直接Bに対して質問を投げかけるものではないことである。つまり、この発言は平叙文で組み立てられているのであって、疑問文で組み立てられてはいない。したがってこの発言は本来、Bからの(少なくとも質問へ

の) 応答を必要としないはずである。それなのにBの応答が(しかも特定の行為をするように)条件づけられていることは何を意味するのか。

これが意味するのは、釣り出し装置の核にあるメカニズムである。すなわち、ある知識について十全な権限をもつ者に対して、権限が限定された者が自分の知るところを平叙文で語るとは、純然たる〈知っている〉ことの表示とは理解されない。むしろ、それは限定的にしか〈知らない〉と受け止められる。つまり知識の存在ではなく、不在もしくは欠如が刻印される。それゆえ、十全な知識へのアクセスにもとづく語りがなされるように促すメカニズムが作動するのである。

本稿が取り上げる連鎖は、このメカニズムを釣り出し装置と共有している。この連鎖の場合、親以外の者がこの場で見た子どもの行動について描写することが、親という十全な知識へのアクセスをもつべき者に対して、自分の知識の限定性と欠如を刻印する。これによって親は、子どもの普段の様子を語るように条件づけられる。それゆえこの第1成分の行為は、〈説明促し〉とでも呼ぶことができるだろう。

しかしこの説明促しは、釣り出し装置ともまた異なった手続きである。第1成分については、たとえば先に①として挙げたように、現下この場で生じた、親本人ではなく子どもへの言及という点で異なる。また第2成分については、④として挙げたように子どもの普段の様子というかなり絞り込んだ説明を求めている点で異なっている。そこで次に、これらの行為がいかに構成され、連鎖がいかに組織されるのかを検討する。

5.2 知識の限定性の刻印(1)——気づきの表示

連鎖第1成分の発言は、知識の限定性もしくは欠如を刻印することで説明促しとして構成される。先に見たように、その基本的な要素は、①発言が現下に生じた子どもの行動に対してなされ、②この場において生じたことについての報告、つまり描写であること、この2つである。

①は、発言の位置上の要素である。現下で生じた子どもの行動への言及であるということは、必ずその行動が生じた〈後で〉なされる発言だということを意味する。連鎖第1成分の発言は、ある子どもの行動がすでに生じた後の位置でなされることによって、当該子どもの行動について「いま初めて気がついた」ことを主張したものと認識可能になる。つまり、当該子どもの行動について〈気づき〉を表明したものと認識可能になる(たとえ、この子どもがよくこのような行動を取ることを、はじめから知っていたとしても)。

②は、発言の形式的な要素である。この場で見てわかることについての描写は、その場にいる者であれば誰でも可能な行為である。それゆえ、この発言の情報的な価値はきわめて低く位置づけられ、したがって話者の子どもに対する知識上のアクセスがないことが伝えられる⁵⁾。

これら2つの要素が組み合わされることで、連鎖第1成分の発言は、受け手である親にある謎を突きつけることになる。それは、「なぜ、いま、ここで、この子ど

もの行動についての気づきを表明するのか」という謎である。受け手はこれを分析し、そこに連鎖第1成分の話者の子どもに対する知識の欠如を見て取ることができる。それによってこの発言は、(子どもにかんするアクセスがない者からの)説明促しとして構成されるのである。

気づきとして組み立てられる必要性から、説明促しの位置は多くの場合、子どもの行動の直後もしくは現在進行形の段階でなされる。データ1のAの描写(01行目)は直後の例である。次のデータ4は、現在進行形の子ども(コウタ)の行動に対して描写がなされる例である。

(4) ぐじゅぐじゅ

((C・D・Eは母親で、ダイニングテーブルで話をしている。Dの子どものコウタ(6ヵ月くらい)は、ダイニングテーブルから数メートル離れたタタミのフロアでSたちスタッフが相手をしている。コウタが大きな泣き声を上げて、Dは話を止め、上体を捻ってコウタを見つめる。その5秒後くらいから、Cも話をするのを止めてコウタを見つめはじめる。以下に提示するデータでもコウタは泣き続けている))

- 01 S : どうしたん
02 (0.4)
03 S : ↑どうしたんコウタちゃん。
04 (1.8) ((Dが笑顔を浮かべながら、上体をテーブルに戻す))
05 (E) : [u hu hu huh
→06 C : [(コウタ)くん今日は:: [ぐじゅぐじゅ [し h た h (い) =
07 D : [((肯く)) [((肯く))
→08 C : =h ん h で h す h ね h =
09 (C) : =ehe heh
*10 D : ((一瞬コウタのほうをふり向き、すぐに顔をCに向け直し))
*11 なんか最近あかんね:: [:ん ((再度コウタのほうを向く))
12 (C) : [ああそうなん

はじめに、上で①として述べた発言の位置について検討する。この会話では、直前からDの子ども(コウタ)が少し離れた場所で泣いている。Cは、それについて「[(コウタ)くん今日は:: ぐじゅぐじゅ し h た h (い) h ん h で h す h ね h」と描写している(06・08行目)。このCによる「ぐじゅぐじゅ」という描写は、コウタが泣いた後でなされているのであって、泣くのに先立って彼の機嫌に言及しているのではない⁶⁾。

もちろん、子どもが何らかの行動をする前に、それを描写することは不可能である。しかし親であるDならば、コウタが泣く前に彼の機嫌に言及することは不可能ではないし、不自然でもない。たとえば、Dはコウタを連れてやって来た直後

のタイミングで、他の母親への配慮というかたちで「今日はコウタ機嫌悪いねん」と、子どもの状態へ言及することができる。つまり、子どもが泣くという具体的な行動を取るよりも先に、子どもの状態についての知識上のアクセスの存在を伝えることができる。

このデータでDは、Cの説明促しへの応答において知識上の優位なアクセスを表示している。すなわち、Dの「なんか最近あかんね:::ん」(11行目)という応答は、彼女がCの描写を待つまでもなく、すでにコウタの機嫌が悪いことを知っていたことを表示し、それによってCの描写を承認している。

次に、上で②として述べた発言の形式について検討する。CとDが発言を組み立てるときに用いる時間表現に知識上の勾配が生じている。Cは描写において「今日」という表現を用いている(次のデータ5におけるGの説明促しでも、同じく「今日」(07行目)が用いられている)。これに対してDは、「最近」という表現を用いてコウタの様子に言及している。つまりCが自分の観察をこの場において見られたことに限定しているのに対して、Dは「最近」というそれよりも長いタイムスパンで(くり返し)生じているコウタの行動パターンの一例として位置づけ直している。つまりデータ1同様、親のDはこの場でできごとを子どもの普段の様子の中に位置づけ、子どもコウタに対する自分の知識上の優位なアクセスを表示している。

以上のように、説明促しは子どもの行動の後の位置で、それを描写するということによって構成される⁷⁾。

5.3 知識の限定性の刻印(2)——謎のクリアな提示

説明促しは子どもの行動の後の位置でなされるが、それは必ずしも子どもの行動の直後や現在進行形の子どもの行動への言及とは限らず、多少時間的に離れた位置でなされることもある。その場合、語彙的なリソースやお互いの関係性などを用いて発言を組み立てることで知識の欠如を刻印し、説明促しを認識可能にすることができる。

次のデータ5は、お互いがある程度知り合いになっている母親たちの会話である。GはHの子ども(リョウ・8ヵ月くらい)を描写するなかで、自分たちが会っていなかった期間での子どもの変化にかんする知識の欠如を伝え、説明を促している。

(5) 家でもそんな感じ？

((この直前で、リョウがGの差し出したクマのぬいぐるみを見て喜び、GとHはリョウが笑っているという話をしている))

01 G : — ((手に持った鈴を鳴らしはじめる))

02 12.1 ((Gは鈴を鳴らしながら、周囲を見回したりしている。

03 — Hは色々な角度からリョウの顔を覗き込んだりしている))

→04 G : ((少し体をHのほうにかがめて)) えっでもなんか: (0.7)

- 05 前は (0.6) 割とおとなしかったけ [ど:]
 06 H : ((背きながら)) [°うんうん°=
 →07 G :=今日は (0.3) すごい (0.2) [元気] やねえい
 08 H : [うん] ((同時に肯く))
 *09 うん元気元気 h
 10 (0.3)
 11 G : ↑ねえ
 12 (1.3)
 ☆13 G : 家でもそんな感じ?
 14 (0.5)
 ★15 H : ↑家でもうん.>なんか<ひとりでしゃべってる.
 16 G : [ああ
 17 I : [お.: [お?
 ★18 H : [°うん°「テッテテテ」でゆって.
 ((H が、リョウは「テテテ」と言うのが「ブーム」だと語る))

G の H に対する説明促しは、04・05・07 行目でなされている。この説明促しは、位置的・形式的に先に見た2つの例とは少し異なっている。

位置的に見て G の説明促しは、子どもが笑ったという行動の直後や現在進行形のできごとへの言及というかたちを取っていない。もちろん、子どもが笑った後であることは確かだが、この説明促しは子どもの様子を描写しえた最初の時点ではなく、しばらく H たちとのやりとりから離れた (01~03 行目) 後という離れた位置で差し出されている。G はそれゆえ、この発言が遅れて表明された気づきだとわかるように発言を組み立てる必要がある。この発言の冒頭が「え」で開始され、必ずしも自然な位置での発言ではないことが刻印されているのはそのためである (Hayashi 2009)。

また、描写の組み立てかたも異なっている。この場でのリョウの様子への直接的な言及は、「今日は (0.3) すごい (0.2) 元気やねえい」(07 行目) という描写によってなされている⁸⁾。しかしこの描写は、同じ発言順番構成単位のなかで、以前に G が H 母子と会ったときのリョウの様子の描写に先立たれている。「前は (0.6) 割とおとなしかったけど.:」(05 行目) という部分がそれである。

以前のリョウの様子を描写することは、リョウへの知識上のアクセスの主張を強化するという一面をもつ。だが他方でこの発言の組み立ては、G のリョウについての知識の欠如を刻印してもいる。その欠如とは、G が以前にリョウと会ったときの様子「おとなしかった」(05 行目) が現在のリョウの様子「元気」(07 行目) へと変化したことについての知識の欠如である。つまり G が「しばらく見ないうちにリョウの様子が変化したのはなぜか」という〈謎〉を抱えていることがクリアに伝えられる。このようにして、この発言の組み立てかたは、彼女が H 母子と会って

いない期間に生じたりヨウの変化についての知識の欠如を明らかにし、それを説明してくれるようにHに促していることを認識可能にする。

以上で見たように、子どもの行動について直後や現在進行形で描写しなかった場合でも、一定の語彙的なリソースを用いることで後からそれへの気づきを示し、親の説明を促すことができる。またお互いの関係性をリソースとして用いることで、説明促しを明確にすることが可能である。

6 連鎖第2成分

次に、連鎖第2成分の2つのタイプについて手短かに述べる。説明促しに対して、親は子どもに対する知識上のアクセスの存在を埋め込んだ応答をする。このとき親の応答は、自分が知識のアクセスをもつことを〈主張〉する場合と〈表示〉する場合がある。

主張とは、アクセスをもつ立場に指向しつつも、その証拠が発言のなかに組み込まれていない応答である。したがって主張タイプの応答がなされた場合、親に対して「本当にこの子どもの行動を日頃から把握しているのか」という疑いを差し挟むことができる。これに対して表示とは、証拠が発言のなかに組み込まれている応答である。したがって表示タイプの応答がなされた場合、(その把握のしかたが適切かどうかを問題にすることはできても、) 親が何らかのかたちで子どもの普段の様子を把握していること自体は否定できない⁹⁾。

主張タイプの応答は、承認という子どもの具体的な行動に言及しないかたちを取る。データ1ではBの「そうそうそう」(02行目)、データ5ではHの「うん元気元気h」(09行目)という発言がこれである。これに対して表示タイプの応答では、子どもの普段の様子への位置づけが見られる。データ1ではBの「↑ちょっとの距離はこれで移動する」(04行目)、データ4ではDの「なんか最近あかんね:::ん」(11行目)という発言がこれに当たる。

さらにデータ5でも、Hの「↑家でもうん.>なんか<ひとりでしゃべってる。」(15行目)、「うん°『テッテテッ』てゆって。」(18行目)という発言が、子どもの普段の様子への位置づけを行っている。しかしこのHの表示タイプの応答は、データ1・データ4とは違って説明促しへの直接的な応答として差し出されたものではない。むしろこの応答は、主張タイプの応答がなされた後、第1成分の話者が打った手立てによって引き出されているように見える。次にこの点を検討する。

7 応答の追求

先に見たように、説明促しが条件づける応答は、現下の子どもの行動を普段の子どもの様子のなかに位置づけるような発言である。つまり表示タイプの応答である。したがって主張タイプの応答は、不十分なものとして目立つものとなる。その不十

分さは、たとえば主張タイプの応答がなされた後で沈黙が生じることで目立つものとなる。そのような場合に第1成分の話者は、主張タイプの応答があった後で子どもの普段の様子への位置づけを親が行うように、〈応答の追求〉(Pomerantz 1984b)を遂行する場合がある¹⁰⁾。

たとえばデータ5で応答の追求が見られる。Gのリョウの機嫌についての説明促し(04・05・07行目)に対して、Hは「うん元気元気h」(09行目)と主張タイプの応答をするに留まり、表示タイプの応答を続けようとはしていない(10行目)。この不在に対して、Gは「↑ねえ」(11行目)とHからの応答を追求しているが、やはり応答はなされない(12行目)。この後の位置でGは、「家でもそんな感じ?」(13行目)ときわめて明示的なかたちで、リョウの普段の様子についての説明を要求している。そして、それに応答してHは「↑家でもうん.>なんか<ひとりでしゃべってる。」(15行目)、『テッテテッ』てゆって。」(18行目)と、子どもが機嫌の良いときに家でもしゃべっていることを語る。つまり表示タイプの応答がなされ、子どもの行動についての説明がなされている¹¹⁾。

以上のように、説明促しが不首尾に終わって求めた説明が得られない場合、第1成分の話者は直接的なやりかたを用いて子どもの普段の様子について語るように要求する。このことはひるがえって、第1成分の説明促しの求めている知識が子どもの普段の様子についての語りであることを裏づけている¹²⁾。

8 結 論

以上から説明促し連鎖では、親本人をふくめた参加者たちが、参加者のひとりが親であることを大いに当てにしながら発言していることが解明された。説明促しという行為が親に条件づけるのは、現下の子どもの行動を普段の様子に位置づけるような語りである¹³⁾。したがって、この行為の連鎖において親に期待されていることは、〈子どもの様子を普段から把握していること〉だといえる¹⁴⁾。

だから親は、説明促しに応答することを通じて、子どもについての応答可能性＝責任(responsibility)を伝えることができる。説明促しに応答可能であることは、正に親としての説明責任(accountability)を果たしていることを意味するのである。このことは逆にいえば、十全な応答ができない場合、親として責任を果たしていない兆候として受け止められる可能性があるということでもある。この意味で説明促し連鎖は、会話の参加者たちが親という概念の〈概念分析〉(西阪 2008; 前田 2008)を通じて、子どもについての責任の所在を求める実践であるし、同時に親という立場・アイデンティティがコミュニケーションのなかで実現されていくことを例証している¹⁵⁾。

本稿のデータで説明促しに応答していた親たちもいつかは、子ども自身が自分のことについて語るように仕向けるようになるだろうし、子どもは親が自分のことを「勝手に」語ることに抵抗するようになるに違いない。また子どもに接する大人た

ちも、説明促しを差し出すのではなく、直接子どもに応答を求めるようになるだろう。このことは、親の子どもに対する（説明）責任が低下し、同時に子どもの自分自身についての（説明）責任が芽生えはじめたことを意味する。親をふくめた大人たちや子ども自身にとって（Forrester 2010）、子どもの〈成長〉とは、たとえばこのような日々の他愛ないコミュニケーション的な現象として立ち現れてくるのではないだろうか。

【付記】 本稿はシンポジウム「エスノメソドロジー研究のフロンティア——ケアと教育の現場から」（2010年1月10日・奈良女子大学）での報告を大幅に修正したものである。

【謝辞】 調査に協力して頂いた子育て支援サークルの利用者・スタッフの皆様には厚くお礼を申し上げる。また本稿は、萌芽的な段階で会話分析研究会（串田秀也氏主宰）のデータセッション（2008年9月2日、2009年5月30日、2009年10月17日）から重要な示唆を得た。コメントを寄せて頂いた皆様に感謝する。さらに、本稿を仕上げる段階で早野薫氏・平本毅氏・小宮友根氏・串田秀也氏・湯川純幸氏からも貴重なコメントを頂いた。深く謝意を表する。

【注】

- 1) じっさい、親が親以外の者に対して、子どもについての知識上のアクセスで劣位になる発言をすることもある。これについては注11を参照。
- 2) 本稿では母親のデータを多く取り上げるが、次のデータのように父親の場合でも同じようなやりとりが生じる。

(6) お茶一気飲み

（L・Mはスタッフ、Nは父親。ミツルはNの子ども（2歳10ヵ月）。ミツルはペットボトルでお茶を飲んでる）

01 (1.5)

→02 L : むっちゃ [喉渇いて h [る h

→03 M : [いつ- [いっちょまえやなあ飲みかた::

04 (0.6)

*05 L : °°ほんとや [なあ°°

*06 N : [まお茶やからいいんですけどね、これがたとえば=

07 M : = [お::ん

*08 N : [あの:::ねえ？飲みやすいお茶あるでしょ::？私たちの飲むやつ

（(Nが、ミツルはひとりでペットボトル1本を飲み切ってしまうことがあるという話を続ける））

Mは03行目で「いっちょまえやなあ飲みかた::」と、ミツルがお茶を飲む様子を描写している。これに対して、スタッフのLと父親のNが応答しているが、そこにふくまれるミツルに対する知識上のアクセスは大きく異なる。Lは、「°°ほんとやなあ°°」（05行目）とMに対して知識上のアクセスで上回ろうとしていない。これに対してNは、「飲みやすい」お茶ならペットボトル1本を飲み切ってしまうという、この場からは観察できないことを語りはじめている（06・08行目）。つまり、Mが知りえないミツルの普段の様子を語ることで、ミツルにかんし

て優位なアクセスをもつことが伝えられている。本稿が取り上げる連鎖にとって重要なことは、親の性別ではなく、親という立場に期待できる知識上のアクセスである。注 14 も参照。

- 3) 本稿で取り上げる手続きをふくむ、①子どもの行動があったとき、②親以外の者がそれについてコメントし、③親がそれに対して何かコメントするやりとりは、65 ケースあった。なお、両親が揃ってその場にいるデータはなかった。
- 4) 描写は〈記述〉という行為の一部である。また記述については、いくつかの先行研究 (Schegloff 1988; Stivers 2005) がある。しかし記述には、たとえば旅行に行って見聞きした話 (Schegloff 1988) のように、他の場所・他の時点であったことへの言及もふくまれている。したがって本稿の対象とする発言を記述と呼ぶと、焦点がぼやけてしまう。そこで本稿では行為記述の肌理を細かくし、これらの発言を描写と呼ぶ。
- 5) 会話分析は、参与者自身が会話のなかでつねに突きつけられている「なぜ、いま、それを (why that now)」(串田 2006: 61-2; Schegloff 2007: 2) という課題に定位して会話データの検討を進める。本文で指摘した 2 つの要素、つまり発言の〈位置と形式 (position and composition)〉(Schegloff 2007: 20) にとくに注意を払うことは、この会話分析の基本的なスタンスから要請されるものである。
- 6) C の説明促し (06・08 行目) は、S の発言 (01・03 行目) への応答となされたものではない。S は C たちとは離れた場所にて、C たちの会話に入っていない。また S の発言はコウタに、C の発言は D に向けて差し出されている。
- 7) 記述は不可避免的に他の行為の〈乗り物 (vehicle)〉になるとされる (Schegloff 1988: 19) が、描写についても同じことがいえる。多くのデータで描写は、親に対して〈話題提供〉(Schegloff 2007: 169-80) となっているし、〈称賛〉(データ 6 の 03 行目) など他の行為を遂行しているように見えるものもある。描写によって遂行されている行為タイプの違いによって、説明促し連鎖のバリエーションが生み出される。
- 8) 本稿が取り上げるデータでは、説明促しが「ね」という終助詞で完了しているケースが少なくない (データ 1 の 01 行目、データ 4 の 08 行目、データ 5 の 07 行目)。発言順番末尾の「ね」は、話者交代や同調的な応答への明示的な指向を刻印する場合がある (Morita 2005: 105-15) が、これらのデータの「ね」も説明促しという行為の遂行を支えている。
- 9) 主張タイプと表示タイプという応答の区別は、会話分析で広く用いられる理解の〈主張〉と〈立証〉の区別の議論 (Sacks 1992: 250-3; 串田 2006: 233-7) を念頭に置いている。
- 10) 一般に応答の追求とは、ある行為に対して十分な応答がなされない場合に、応答を得るべく何らかの手立て (たとえば、その行為をもっと強力なかたちにしたもの) を打つことで、連鎖第 1 成分の発言が構成する行為を明確に受け手に伝え、応答を得ようとすることを指している (Pomerantz 1984b; 串田 2006: 66-7)。
- 11) 主張タイプの応答の後で、親が自分から子どもについての発言をしても、それが子どもへの知識上のアクセスの優位性を表示するものではない場合、やはり応答の追求がなされる。
次のデータ 7 では、O が少し離れた場所にいる P の子ども (マミ) が玩具を口に入れようとしているのを見つけ、この行動についての説明を P に促している。しかし P はこの行動を説明するのではなく、むしろ自分の見立てを述べ、それへの意見を O に求めている。

(7) おなか空いてんかなあ？

((O・P・Q・R は母親。直前では、O の子どもの行動が話題になっている))

01 (3.0)

- 02 O : nhuh マミちゃんもっすごい食べてるけ h ど h [he he he he he =
 *03 P : ((素早く O のほうを向き)) [そう
 →04 O : =he he heh heh [heh heh heh
 *05 P : [も::おなか [空いてんかな h あ h:h:h?
 →06 O : [よ::-
 →07 ¥よ::口んなか見えますけど ¥ [o::u u u u =
 *08 P : [hu huh
 09 Q : =hah
 *10 P : おなか空いてんかなあ:: ((言った後、クッキーを食べる))
 11 (R) : huh hu:: °huh huh°
 12 (0.9)

O の説明促し (02 行目) を、P はすぐに「そう」 (03 行目) と承認している。つまり主張タイプの応答をしている。しかしこの後 P は、続けて表示タイプの応答をしない。むしろ、「も::おなか空いてんかな h あ h:h:h?」 (05 行目) と、このマミの行動への自分の見立てについて、O の意見を求めている。つまり、P はこのマミの行動について、よく知る者としてふるまっていない。むしろ知識上のアクセスを O よりも劣位に位置づけている。

これに対して O は、その発言のすぐ後の位置で、「¥よ::口んなか見えますけど ¥o::u u u u」 (07 行目) と 02 行目の説明促しで言及したものと同一マミの行動について言及し、応答を追求している。この応答の追求は、すでに 06 行目 ([「よ::-」) で開始されつつあったものと同じように見える。つまりこの応答の追求は、P の 05 行目の発言にオーバーラップして途中で止められた発言が、オーバーラップ解消後に〈再生〉 (串田 2006: 82-91) されたものである (データ 6 の M の 03 行目の発言も参照)。したがって、05 行目における P の O に対する意見の求めは、応答の追求を遂行するという O の当初の予定に、何ら変更をもたらさなかったのである。このことは、O にとって P の当該発言が、なされるべき説明として不十分だったことを意味している。なお、このようなデータはきわめて稀である。

- 12) 説明促しと主張タイプの応答を、ここで応答の追求と呼んでいる発言を第 1 成分とする連鎖への〈前方拡張 (pre-expansion)〉 (Schegloff 2007: 28-57) と記述することはできない。なぜなら、①説明促しに対して当該連鎖へと進むことを阻止できる応答は想定しがたく、②主張タイプの応答がなされた後で沈黙が生じる理由も説明できないからである。
- 13) 子育て支援サークルにやってくる親は、多かれ少なかれ他の親と話をすることを望んでいる。説明促し連鎖は、子どもについての話という親にとって話しやすい話題を開始するきっかけとなりうる (注 7 も参照)。したがって説明促し連鎖は、子育て支援サークルという場面の核心にある活動を実現するうえで大きな役割を担っている相互行為的な手続きのひとつだといえる。
- 14) したがって、本稿では子育て支援サークルというフィールドゆえ、親以外の者と親でのやりとりとして説明促し連鎖を記述したが、たとえば平日は子どもの面倒をみていない父親が休日に、普段から子どもの世話をしている母親に対して説明促しをすることも十分ありうる。その場合に母親は、子育て支援サークルで出会う他の母親やスタッフの場合とは違って、父親に対しては「なんで父親やのに、そんなことも知らへんの」と、相手が〈普段から子どもの様子を把握しているべき者〉であることに指向した発言をすることも可能だろう。
- 15) 説明促し連鎖と類似する手続きは、住まいの持ち主と訪問客、ペットの飼い主とその友達などの会話でも見られると予想できる。説明促し連鎖 (や釣り出し装置) は、参与者どうしに知

識上の勾配がある場合に利用可能な情報引き出し手続きのバリエーションなのである。

【トランスクリプション記号の表記】

.	: 音調が下がっている
?	: 音調が上がっている
↗	: 音調が少し上がっている
↑	: 音調が目立って上昇している
::	: 音声が増ばされている
-	: 発言が途切れている
> <	: 比較的速い発言
<u>文字</u>	: 比較的大きな音声である
°文字°	: 比較的小さな音声である
=	: 上下行の発言がつながっている
[]	: 上下行の発言の開始・終了が同時
(文字)	: 発言が聞き取りにくい
(数字)	: 0.1 秒単位の沈黙
h	: 注記しないかぎり笑い声
h 文字 h	: 笑いながらの発言
¥ 文字 ¥	: 笑い出しそうな音声の発言
(())	: 分析者による注記

【文献】

- Antaki, C. and S. Widdicombe eds., 1998, *Identities in Talk*, London: Sage.
- Forrester, M., 2010, "Ethnomethodology and Adult-Child Conversation: Whose Development?," H. Gardner and M. Forrester eds., *Analysing Interactions in Childhood: Insights from Conversation Analysis*, Chichester: Wiley-Blackwell, 42-58.
- Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, New Jersey: Prentice-Hall.
- Hayano, K., 2011, "Claiming Epistemic Primacy: Yo-Marked Assessments in Japanese," T. Stivers, L. Mondada, and J. Steensig eds., *The Morality of Knowledge in Conversation*, Cambridge: Cambridge University Press, 58-81.
- Hayashi, M., 2009, "Marking a 'Noticing of Departure' in Talk: Eh-Prefaced Turns in Japanese Conversation," *Journal of Pragmatics*, 41 (10): 2100-29.
- Heritage, J., 2002, "Oh-Prefaced Responses to Assessments: A Method of Modifying Agreement/Disagreement," C. E. Ford, B. A. Fox, and S. A. Thompson eds., *The Language of Turn and Sequence*, New York: Oxford University Press, 196-224.
- , 2008, "Constructing and Navigating Epistemic Landscapes: Progressivity, Agency and Resistance in 'Yes/No' versus 'Repetitive' Responses to Yes/No Questions." (= 2008, 川島理恵訳「知識に関する眺望 (epistemic landscape) を描きだすこととその眺望に働きかけつつそのなかを進むこと—— yes/no 質問に対する yes/no 返答と繰り返し返答に込められる進行性と主体性, 抵抗」『現代社会学理論研究』2: 14-25.)
- and A. Lindström, 1998, "Motherhood, Medicine, and Morality: Scenes from a Medical Encounter," *Research on Language and Social Interaction*, 31 (3/4): 397-438.

- and G. Raymond, 2005, “The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and Subordination in Talk-in-Interaction,” *Social Psychology Quarterly*, 68(1): 15–38.
- 串田秀也, 2006, 『相互行為秩序と会話分析——「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社.
- 前田泰樹, 2008, 『心の文法——医療実践の社会学』新曜社.
- Morita, E., 2005, *Negotiation of Contingent Talk: The Japanese Interactional Particle Ne and Sa*, Amsterdam: John Benjamins.
- 西阪仰, 2008, 『分散する身体——エスノメソドロジ的相互行為分析の展開』勁草書房.
- Pomerantz, A., 1980, “Telling My Side: ‘Limited Access’ as a ‘Fishing’ Device,” *Sociological Inquiry*, 50: 186–98.
- , 1984a, “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes,” J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 57–101.
- , 1984b, “Pursuing a Response,” J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 152–63.
- Raymond, G. and J. Heritage, 2006, “The Epistemic of Social Relations: Owning Grandchildren,” *Language in Society*, 35(5): 677–705.
- Sacks, H., 1992, *Lectures on Conversation*, vol.2, Cambridge: Blackwell.
- Schegloff, E. A., 1988, “Description in the Social Sciences I: Talk-in-Interaction,” *IPrA Papers in Pragmatics*, 2(1/2): 1–24.
- , 2007, *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*, vol.1, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sharrock, W. W., 1974, “On Owning Knowledge,” R. Turner ed., *Ethnomethodology: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin, 45–53. (=1995, 岡田光弘訳「知識を所有するということについて」『年報筑波社会学』7: 91–108.)
- Stivers, T., 2005, “Modified Repeats: One Method for Asserting Primary Rights from Second Position,” *Research on Language and Social Interaction*, 38(2): 131–58.
- Suzuki, R., 2009, *Assessment Sequences in Japanese Conversation: Relationality and the Expanded Notion of Self*, Ph.D. Dissertation, University of Essex.
- (原稿受付 2010.3.27 掲載決定 2011.5.1)

Parent Identity in Action:
A Conversational Accomplishment of a Parent Who Knows Best

TOE, Tetsuri
The Japan Society for the Promotion of Science /
Nara Women's University
toe@socio.kyoto-u.ac.jp

This article describes a sequence of actions routinely performed in conversations about an infant between its parent and another participant, and demonstrates that it is an action sequence through which a parent (or a caregiver) can establish her/his parent identity. The sequence consists of two paired utterances, occasionally followed by a third, further-response-pursuing utterance, plus a response to the latter. In the first pair part of the sequence, the participant who is not the parent describes the infant's behavior that can be observed "here and now". The description invites the parent to account for the behavior in light of her/his knowledge about the infant's everyday behavior patterns. Therefore, the sequence here can be called an "account-inviting sequence". This sequence is shown to be based upon an "epistemic gradient" (Heritage 2008) between the parent and the other speaker. Describing the infant's behavior that is accessible to anyone present marks a lack of intimate knowledge about the infant on the part of the first speaker. In responding in the second pair part, the parent conveys epistemic primacy in relation to her/his infant. Two different types of response can be observed. The first type of response by the parent accounts for the infant's behavior based on his/her everyday behavioral patterns, thus presenting evidence for epistemic primacy regarding the infant. The second type only confirms the previous description and does not give any ground for epistemic primacy as a parent. When the latter type of response is given by the parent, the previous speaker can explicitly request such an account. Through engaging in these "account-inviting sequences", the parent can be seen to be claiming her/his identity as a "responsible" parent "in action".

Key words: conversation analysis, infant's parent, epistemic order

(Received Mar. 27, 2010 / Accepted May 1, 2011)